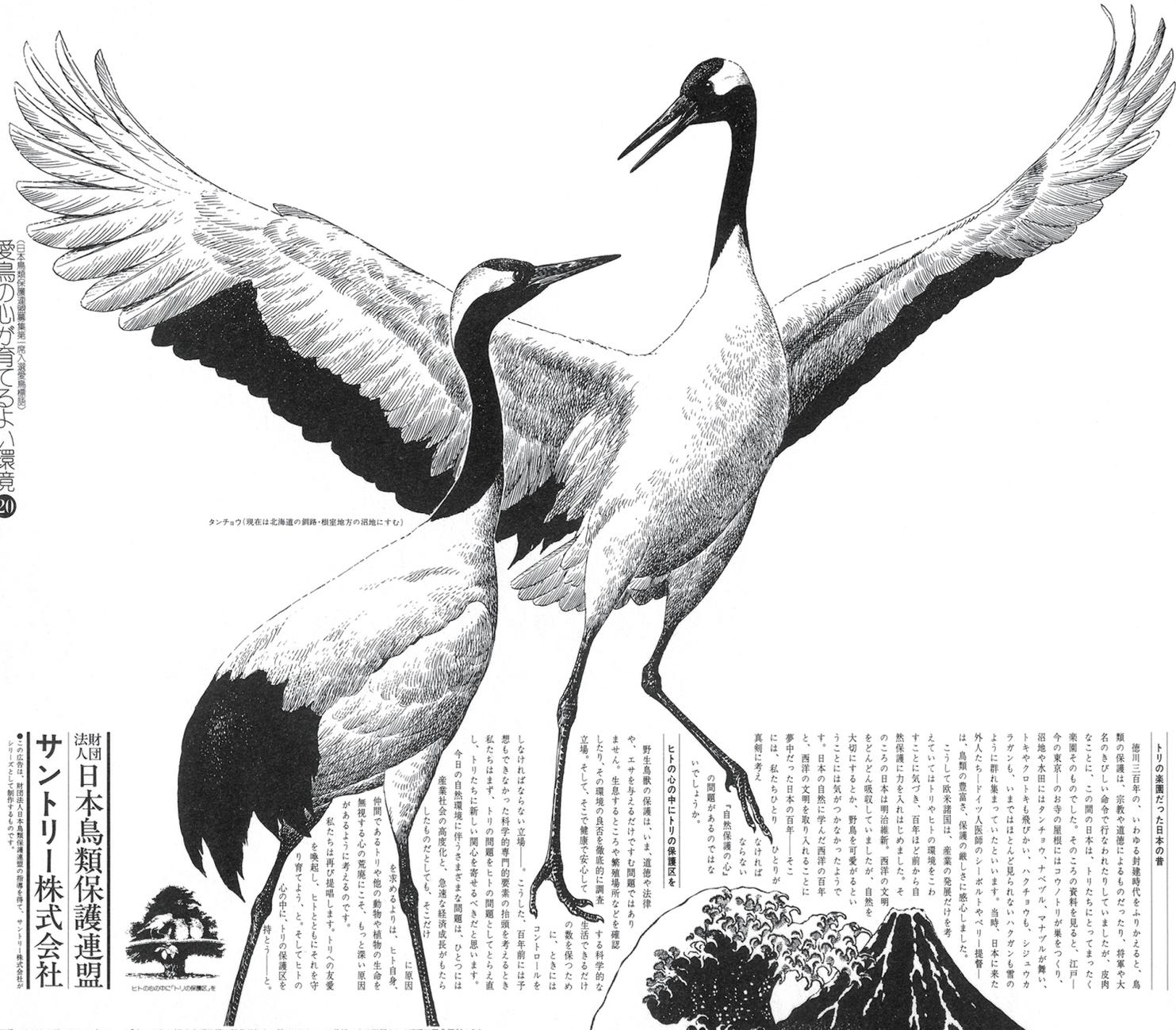


# トリたちに新しい関心を ヒトの問題として



タンチョウ（現在は北海道の洞爺・根室地方の沼地にすむ）

愛鳥の心が育てるよい環境

## トリの楽園だった日本の昔

徳川三百年の、いわゆる封建時代をふりかえると、鳥類の保護は、宗教や道徳によるものだったり、將軍や大名のきびしい命令で行なわれたりしていましたが、皮肉なことに、この間の日本は、トリたちにとつてまったく楽園そのものでした。そのころの資料を見ると、江戸一今の東京一のお寺の屋根にはコウノトリが巣をつくり、沼地や水田にはタンチョウ、ナベヅル、マガヅルが舞い、トキやクロトキも飛びかき、ハクチョウも、シジュウカラガンも、いまではほとんど見られないハクガンも當のように群れ集まっていたといえます。当時、日本に來た外人たち「ドイツ人医師のシーボルトやペリー提督」は、鳥類の豊富さ、保護の厳しさに感心しました。

こうして欧米諸国は、産業の発展だけを考へていてはトリやヒトの環境をこわすことに気づき、百年ほど前から自然保護に力を入れはじめました。そのころの日本は明治維新、西洋の文明をどんどん吸取していましたが、自然を大切にすると、野鳥を可愛がるという気にならなかつたやうです。日本の自然に学んだ西洋の百年と、西洋の文明を取り入れることに夢中だった日本の百年――そこには、私たちひとり、ひとりには、真剣に考え、ひたすら「自然保護の心」の問題があるのではな

## ヒトの心の中にトリの保護区を

野生鳥獣の保護は、いま、道徳や法律や、エサを与えるだけで済む問題ではありません。生息するところや繁殖場所などを確認したり、その環境の良否を徹底的に調査する科学的な立場。そして、そこで健康で安心して生活できるだけの数を保つためのコントロールを、ときには、

を求めたりは、ヒト自身、仲間であるトリや他の動物や植物の生命を無視する心の荒廃こそ、もっと深い原因があるように考へるのです。私たちは再び提唱します。トリへの友愛を喚起し、ヒトとともにそれを守り育てよう、と、そしてヒトの心の中に、トリの保護区を



ヒトの心の中にトリの保護区を

財団法人日本鳥類保護連盟  
サントリー株式会社

●可愛い支だちを呼ぶためのパンフレット「庭に小鳥を（日本鳥類保護連盟発行）」をお読みください。ご希望の方は送料として切手55円分同封のうえ、右記あてにどうぞ。〒103-91 東京都中央区日本橋局区内 私書箱第231号 サントリー株式会社 愛鳥キャンペーン係